

薬物再乱用防止教室の取り組みに関する一考察

総合精神保健福祉センター ◎松岡明子, 高浦睦美, 中津完, 保田ひとみ
健康福祉局薬務課 熊田 雄, 河村隆宏

はじめに

わが国の依存性薬物の状況を見ると、覚せい剤による依存症者は推定で230万人と言われており、脱法ハーブ、合法ドラッグなど社会的な問題もクローズアップされている。また、薬物事犯については、再犯率の高さから刑罰以外の対策が必要とされている。

わが国では、薬物依存症者は本人も周囲も『治療が必要』と認識することが少なく、その一部がダルクやNAなどの自助グループにつながるが、その他には回復の選択肢がない状況であった。

そうした中、アメリカのMatrix Modelを参考に2006年（平成18年）に認知行動療法による薬物依存症治療プログラム（SMARPP）が開発され、医療機関、司法機関、保健機関において実施され始め、現在その有効性の検証がなされているところである。

当センターにおいても、薬務課と共同で2009年（平成21年）度から更生保護施設において、薬物依存症治療プログラム（SMARPP）を活用して薬物再乱用防止教室を実施している。

今回、過去4年間の事業の振り返りと2012年（平成24年）度の実施結果をまとめたので報告する。

1 事業の経過

事業の経過は別紙1のとおりである。

2 実施方法、内容

各回のプログラムは次のような流れで行い、平成22年度以降の実施内容は、表1のとおりである。

- (1) プログラムの目標、グループの約束事の音読
- (2) 自己紹介、初回参加時のアンケート記入
- (3) SMARPP-Jrをベースに作成したワークブックの音読
- (4) ワークブックの設問に答えて記述
- (5) 記述した回答を発表
- (6) 回答を基に薬物に関するディスカッションを参加者全員で行う
- (7) 次回までにセッションについての感想文の記入を依頼

※茶菓を準備し、和やかで気楽な雰囲気づくりをする。

表1 実施内容(平成22年度以降)

	内 容
第1回	オリエンテーション 薬物をやめることに挑戦してみよう
第2回	薬物のある生活からの回復段階
第3回	引き金と欲求 あなたのまわりにある引き金について
第4回	あなたのなかにある引き金について
第5回	依存症ってどんな病気？
第6回	再発を防ぐために
第7回	再使用のいいわけ
第8回	「強くなるより賢くなれ」、まとめ

3 平成24年度 実施結果

(1) 参加者

参加者の状況は表2、3のとおりである。

表2 平成24年度薬物再乱用防止教室参加者の実人員（男女別、年代別）

男	女	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	平均年齢
11人	3人	1人 (1人)	2人 (1人)	4人	6人 (1人)	1人	57.4歳

() は女性再掲

表3 プログラム毎の参加者数

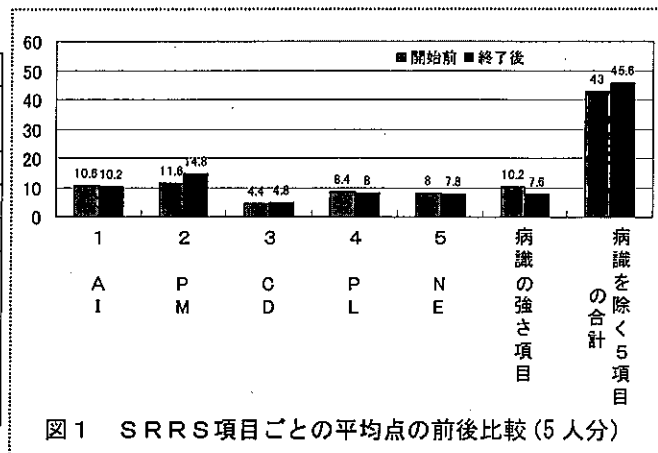
実施回	参加状況																		平均参加者数
	第1回		第2回 夜		第3回		第4回		第5回		第6回 夜		第7回		第8回		計		
	初	延	初	延	初	延	初	延	初	延	初	延	初	延	初	延	初	延	
人	4	4	3	6	1	3	1	3	0	2	3	7	2	7	0	4	14	36	4.5

(2) SRRS (刺激薬物再使用リスク評価尺度) の結果

事前事後ともにSRRS質問票の回答が得られた人は5人で、その事前事後の比較は表4及び図1のとおりである。個別の比較については、抄録上は省略する。

表4 SRRS項目ごとの平均点の前後比較

項目区分	項目	5人平均	
		開始前	終了後
1	再使用不安と意図 (AI)	10.6	10.2
2	感情面の問題 (PM)	11.6	14.8
3	薬物使用の衝動性 (CD)	4.4	4.8
4	薬物へのポジティブ期待と刺激脆弱性 (PL)	8.4	8
5	薬害認識(ポジティブ期待)の欠如 (NE)	8	7.8
6	病識の強さ項目	10.2	7.6
合計	病識を除く5項目の合計	43	45.6



(3) 参加者のアンケート結果

アンケートから得られた参加者の声の一部は表5のとおりである。

表5 アンケートから得られた参加者の声

回数	参加者の声
第1回	・ (薬物の使用を) 思い出さただけで嫌, 思い出さないようにしている。
第2回	・ 刑務所から今回ここにお世話になることで、薬物との回復段階だと思う。 ・ 薬物から遠ざけようとしているのに過去ばかり振り返るプログラムは、今の私にはとても苦痛である。 ・ 依存症ではないのでは?
第4回	・ 参加者がどのような人生を生きてきたのか、その人の心の感情がどのようなものかを感じさせるものだった。 ・ 先生たちは自分たちに対して、相談のできる、一緒になって個々の問題を涙を流せる方だと感じた。
第6回	・ 自分自身のことが少しでも話せたことで、ああそうか、今、自分が話していることは事実であり、改めて自分は大変な生活を送り、今日まで無駄な人生を送ってきたんだ。 ・ 女性の先生や他のスタッフ、ダルクの人と知り合えたことが一番の収穫である。
第7回	・ 自分の分からないうちに自然と言いつけがあったと思う。 ・ 気持ちに振れが生じた場合は、精神保健福祉センターに助言をもらいに行く。 ・ 参加することで、過去を振り返ることができた。 ・ 話すことで自分の中にある様々な気持ちを発散することができたし、ストレス解消ができ、気持ちの苛立ちがなくなった。
第8回	・ 他の趣味・散歩・映画・読書等で自分の気持ちを高めるように努力したい。 ・ 何かがある場合は先生たちに相談をする。 ・ これはすべて自分自身のためであり、同じことの繰り返しでは本当の意味での残り少ない人生を無駄にしよう。 ・ 自分自身をいたわりたいと思う。 ・ 最後にもらった修了証や副賞のミサンガが心のストッパーになると思い、信じて生きていく。
その他	・ 見学参加の刑務所職員からも、お茶やお菓子を出し、ソファに座ってプログラムを行うということは、刑務所内ではできないことで、良い雰囲気作りになるという感想があった。

3 考察

(1) SRRSの結果について

有効回答5人分の結果から傾向を読み取ると、以下のとおりになる。

ア 5人全体の得点変化としては、開始前より終了後で得点が上昇しており、再使用リスクが高まっている傾向を示している。特に、参加回数が多い人の得点が増加しているが、実施者としては、参加回数が多い人に効果の手ごたえを感じている。プログラム開始前の回答については、すべての設問に対して「あてはまらない・あまりあてはまらない」を選択しているなど、薬物問題に対する否認が回答に影響したと考えられる。

イ プログラム終了後の結果で、参加回数が多い者で高い得点となっていることについては、介入を受ける中で他者とのふれあいや自分を見つめ直すこと、または断薬を経て認知機能が回復したことによって内省力が高まり、素直に回答できるようになったことが、得点に影響していると考えられる。

ウ 項目別に見ると、特に参加回数が多い者では、AI、PMの項目の上昇傾向が見られる。これはプログラムを受ける過程で、参加者の内省力が高まり、気づきが促され、一時的に不安やストレスが高まった可能性がうかがわれる。これらのケースについては、プログラム終了後も施設の内務課などにつなげることで、個別に継続的な関わりをしていく必要があると考える。

(2) 参加者のアンケートについて

プログラム開始時はプログラムや自分が抱える「依存症」という病気について否定的であったが、プログラムが進むにつれて、ダルクや当センターのように司法以外の関係機関の存在を知り、相談場所としての利用を考えるとともに、これまでの生活などを振り返り、生き直しをしようという姿勢の変化が読み取れた。

司法関係者以外の者がプログラムを実施することより、対象者を暖かく迎えることや敬意を持って接することができ、対象者が刑務所や過去の生活では経験しなかった評価や指示される関係ではない、対等な接し方が自己の生き直しを考えるきっかけの一つとなったと考える。

また、修了証などに関するプラスの感想から、自己効力感を高めるのに効果的であった。

(3) 参加者の様子について

プログラム参加について、開始当初は施設の働きかけによる受身的な参加姿勢であったが、プログラムが進むにつれて自主的な参加となった。また、更生保護施設からも参加者の生活や言動に良好な変化があったとの意見が寄せられた。このことから、このプログラムが参加者にとって有効なプログラムであったと考える。

(4) 事業実施の方法について

ア 実施頻度を週1回としたことや実施時間を1回1時間強に短縮したことについて、頻度については、他機関でも同様の頻度で実施しており、実際にも前回の内容を想起しながらプログラムを進める上で適当であったと考える。時間についても、毎回のアンケートの中で必要な内容の感想が記載されており、参加者に負担のない時間であることから適当な時間であったと思われる。

イ 実施者と参加者、参加者同士の人間関係の確立においても、第4回頃から意見や話し合いが活発にできるようになった実感もあり、最低でも8回のプログラムは必要であったと考える。

ウ 当初は、テキストの読み合わせを参加者も一緒に行ってきたが、字が読めない参加者への配慮と音読することにより内容の理解を妨げる様子があったため、スタッフが音読する方法に変更した。このことは、参加者からも好評であったことから、この変更は有効であったと考える。

エ 広島ダルクスタッフの参加は、当事者として参加者と同じ立場に立てること、回復の手本となること、意見が出にくい時に話題提供者になることなど効果的な役割を担っている。参加者からも直接話せたことへのプラスの感想もあり、重要なキーパーソンであったと考える。

(5) その他

本事業を実施することは、薬物依存症者の意見や経験を聞く貴重な場となり、職員の薬物依存症の理解を深め、今後の当事者支援や家族支援に役立つ学習の場ともなったと考える。

4 今後の課題

(1) 事業の実施方法

ア 実施頻度、実施期間の検討の必要性

多くの回復者の支援をするためには継続した支援が必要であり、年1クールだけの実施ではなく、複数回の実施やエンドレスでの実施などを検討していく必要がある。

イ 夜間実施の検討

参加しやすい環境づくりのために、参加者や施設の希望に合わせ、平成24年度は2回の夜間実施を試行した。夜間実施では参加者が多く、昼間働く若い世代の参加もあった。今後、夜間実施回数の増加などの検討が必要であるが、行政機関での事業という点で困難さがある実情である。

ウ 事業の実施場所の検討

4年間同一場所で事業開催をしているが、今後は他地域での開催も検討をしていく必要がある。

エ 資料の見直し

資料の内容に変更が必要な箇所がいくつかあり、来年度実施の際は再検討し、修正を加える予定にしている。また、現在プログラムに使用している資料は、白黒コピーで印刷したものをファイルに閉じたものを使用しているが、参加者の動機付けを高めるためには、製本されたものを渡すことが効果的であるとの報告もあることから、資料の製本化を検討している。

(2) 関係機関との連携

薬物依存症者に直接アプローチするプログラムを実施している行政機関は、全国でも8か所だけであるが、精神保健福祉センターや保健所での実施に意義があるとされている(参考文献1)。

現在更生保護施設、保護観察所、刑務所などの司法機関や病院との連携はある程度できているが、保健所、市町など当事者が生活することになる『地域』との連携がない。今後は、保健所、市町との連携をしながら、他地域での開催についても検討していく必要がある。

(3) 司法につながっていない薬物依存症者への事業周知

今回の事業では、入所者以外の参加も可能としていたが、更生保護施設等の司法関係施設に呼びかけるしかない現状であり、入所者以外の参加はなかった。今後施設入所していない者や司法につながっていない者への周知についても検討していく必要がある。

おわりに

第三次5か年戦略の目標の一つである『薬物依存・中毒者の治療・社会復帰の支援及びその家族への支援の充実強化による再乱用防止の推進』や、3年後に施行される見通しの『刑の一部執行猶予制度』を見据えると、地域で暮らす薬物依存症者の支援について具体的な対策が不可欠である。その意味でもSMARPPを活用したプログラムは有効な支援策であり、地域のなかでの実施が望まれる。

今後も事業を継続し、その中で評価、自己研鑽をしていきたい。

参考文献

- 1 松本 俊彦 薬物依存症に対する新たな治療プログラム「SMARPP」精神医学 54 巻 11 号 1103-1110, 2012
- 2 松本 俊彦他 SMARPP-16, SMARPP-28, SMARPP-Jr
- 3 松本 俊彦他 薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究 平成 23 年度総括分担研究報告書
- 4 東京都医学総合研究所依存性薬物プロジェクト SRRS (刺激薬物再使用リスク評価尺度)
http://www.igakuken.or.jp/abuse/SRRS_ARRS_ASI/SRRS/srrs.html
- 5 森本 正彦 刑の一部執行猶予制度・社会貢献活動の導入に向けて 立法と調査 2011. 7 NO.318
- 6 平成 24 年度精神保健に関する技術研修 第 4 回薬物依存に対する認知行動療法研修資料

別紙1 薬物再乱用防止教室の経過

年度	21	22	23	24
開催場所	更生保護施設 ウイズ広島	更生保護施設 ウイズ広島	更生保護施設 ウイズ広島	更生保護施設 ウイズ広島
開催時間、頻度	19:00～20:00 10回 15:00～16:00 2回 計12回 1週間に1回 H21.11.2～H22.2.5 (金曜日)	13:30～15:30 計8回 2週間に1回 H22.11.12～H23.2.18 (金曜日)	14:00～16:00 計8回 2週間に1回 H23.11.14～H24.2.20 (月曜日)	14:00～16:00 6回 18:00～20:00 2回 計8回 1週間に1回 H24.8.7～9.24 (月曜日)
参加者	実9人 延28人 1回平均2.3人	実11人 延20人 1回平均1.8人 岩国刑務所職員の見学あり	実16人 延30人 1回平均3.7人 島根あさひ刑務所職員の見学あり	実14人 延36人 1回平均4.5人
プログラムの内容	SMARPP-Jr 使用して12回のプログラムを開始するが、内容や表現が対象者と合わなかったため、途中から SMARPP-28などを添付資料として追加	SMARPP-Jr, SMARPP-28などを参考に8回のプログラムに再編	H22年度プログラムと同様の内容で実施	H22年度プログラムと同様の内容で実施
評価方法	DAST-20 薬物依存に関する自己効力感スケール SOCURATES-8D	DAST-20 薬物依存に関する自己効力感スケール SOCURATES-8D	DAST-20 薬物依存に関する自己効力感スケール SOCURATES-8D	SRRS: 刺激薬物再使用リスク評価 尺度 (東京都医学総合研究所)
スタッフ	薬務課担当者, センター担当者 事業途中から広島ダルクスタッフ	薬務課担当者, センター担当者 広島ダルクスタッフ	薬務課担当者, センター担当者 広島ダルクスタッフ	薬務課担当者, 当センター担当者 広島ダルクスタッフ 広島保護観察所職員 更生保護施設職員
実施する上で のポイント・ 変更事項	● 事業開始に当たっての、関係者への説明・連絡調整 ＜調整のポイント＞ ①行政機関が直接介入する必要性 ②実施者の選考：実施者を固定するか、回毎に変更するか ③薬物依存症者への参加の呼びかけ方法 (事業終了後の評価時に国立精神神経医療センター松本俊彦医師、今村扶美臨床心理士が助言者として参加)	● 更生保護施設から実施の希望あり ● 当センターと薬務課の役割分担の明確化 (薬務課は再使用を認められた際の通報義務があるため、実施主体は当センター、関係事務を薬務課とした) ● 12回では長すぎるという意見があり、8回に短縮	● 過去も含めて、薬物又はアルコール関連問題のあった者のみを参加対象とするように施設側に依頼 (過去は参加人数の確保のため、薬物等の対象者以外にも参加の促しがされていたため) ● 1週間に1回の実施とした ● 修了証や記念品、参加票の工夫による継続参加の促進	
備考	対象者をどうするかについて決定までにかかりの時間を要したが、唯一了解を得られた更生保護施設で実施することとなった。		薬物以外の刑犯者も参加	